

幸福感に基づく国際協力に関わる大学生の特徴ともたらされる変化

—国際協力に関わらない大学生の実態と比較して—

1455023 井上文那

指導教員 藤掛洋子

【背景・目的】本論の目的は、国際協力活動は体験的消費を上回ることができるという新しい見解を示すことにある。そのため、国際協力活動に関わる大学生に共通する特徴と国際協力活動が個人の考え方や価値観に与え得る影響について明らかにし、幸福感に注目して考察する。

社会貢献活動が幸福度を高めるというような研究結果が存在するが、近年ボランティア活動は高まりをみせており、活動人口も増加傾向にある。しかし、注目されている国内ボランティアに対し、海外ボランティアなど国際協力活動の関与人口は減少傾向にあり、中でも著しく関与人口の少ない世代が若者世代となっている。今やグローバル化が進み、日本も途上国に頼り生活をせざるを得ない状況の中、他国に手を差し伸べることは推奨すべき点の1つである一方で、関心の薄さは改善すべきものである。

このような現状に至る要因の1つには、現教育体制に問題があると考えられる。国際協力などの知識があまりない学生からしてみれば、発展途上国へのイメージはあまりいいものではない。そのようなイメージを抱いてしまっている原因には、学校での授業教育、またはメディアなどを通じて植え付けられてしまっているイメージの大きさなどが考えられるが、まずはそのような偏見をなくすことが第一に優先とされるべき目標としたい。

【方法】大学生20名に対する個別インタビュー調査（半構造型）、大学生28名に対する記述式アンケート調査、文献調査

【結果・考察】国際協力に関わる大学生の多くは生活満足度が高いということ、国際協力をするとう国際協力への興味・関心が強まるということがわかった。また、国際協力に関わる大学生は比較的海外に対する興味・関心の方が国内に対するそれよりも強く、自己への関心よりも他者への関心の方が強くなるということが分かった。また、国際協力活動は、自己に何らかのプラスの影響を与えることもわかった。

一方で、国際協力にまったく興味・関心をもたない大学生がいる理由としては、身近に感じられないことや、他人ごとのように感じられてしまう、発展途上国に対するイメージの悪さなどがあることがわかった。

生活満足度については、人間関係が充実していることや、自己成長を感じられている時は生活満

足度が高いという結果は、国際協力に関わらない大学生も関わる大学生も両者に共通して言えることであった。国際協力に関わる大学生が共通して生活満足度が高いのは、この中でも後者の自己成長を感じることができるからではないかと考えられる。自己から他者に関心が向き、視野が広がることは、生活満足度や幸福感にも大きく関りがあるのではないかと考えられる。

【結論】国際協力活動は幸福度を高める働きがあり、自己の成長につなげることができる。

国際協力に興味・関心の強い者に共通する特徴としては、まず、海外に対する興味・関心が強く、また自己に対する興味・関心よりも他者に対するその方が強いということが本研究から明らかになった。他者に対する興味・関心については、国際協力活動を行うことによって考え方が変わるケースも多数あった。先行研究から他者貢献は幸福度を高める働きがあるとされていることから、国際協力活動によって高まった他者に対する興味・関心の強さは幸福度とも関係性があると推測できる。

また、国際協力をすることによるプラスの影響もある。例えば、自分自身の興味・関心を広げることができ、自分自身について見つめ直すきっかけにすることができる。一通りにしか見えなかったものが、まったく知らなかった世界を見ることによって、各個人にある種の衝撃を与え、考え方を広げることができる。視点を高く持ち、主観だけでなく客観的に物事をとらえることのできる視野の広さを身に付けることができるようになるのだ。

先行研究から、体験的消費は物質的消費より幸福度を高める働きがあることは明らかである。体験的消費とは旅行や趣味、コンサートなど物質にかける消費ではないものを表すが、国際協力活動を体験的消費と一言言うにはあまりにも言葉の響きに乏しい。自己成長につながる他者貢献をはじめとした国際協力活動は体験的消費を上回る“成長的消費”として体験的消費を上回ることができるものであり、体験的消費との分類化が必要であると考えられる。